

# 人権教育だより



**第79号** 発行 長野県教育委員会  
 編集 教学指導課心の支援室 発行人 澤井 淳  
 長野市大字南長野字幅下692-2  
 電話 026-235-7450 F A X 026-235-7495

## いじめのない集団づくりのために

### 県内各学校の取組から

全国各地でいじめにより児童生徒が自らその命を絶つという事件が相次ぎ、「いじめ問題」に対して、学校ならびに関係機関の適切な対応・指導が求められています。

長野県教育委員会では、「いじめはどの学校にも、どの教室にも起こり得る」「本人がいじめと感じれば、それはいじめである」「いじめは、人間として絶対に許されない」という認識のもとに、その根絶に向けて全力を傾注してまいりました。

また、教育現場においても、いじめを未然に防ぐ取組、相談体制を見直す取組、命と人権を大切にす取組等について、昨年改訂した「人権教育推進プラン」をもとに、人権教育及び生徒指導の充実・改善に一層取組んでいただいているところです。

「いじめのない集団づくり」をめざし、学校教育の根底に人権教育を据えた各学校での取組を中心に紹介します。

### 取組例1(小学校)

友だち関係をうまく作れなかった学級を、お互いのよさを認め合うことができる学級に変える

Point 学級づくり 認め合う人間関係 自尊感情を高める

#### 1 取組の内容

学級編制替えを行い新しい集団になった時に、相手のことを考えずに勝手な行動をとってしまい友だちとの関係がうまくつれなかった子どもたちが、進級したことをきっかけにお互いのよさを認め合い、友だちの気持ちを考えることのできる学級づくりに取組んだ。

##### (1) 新年度の出会い

「友だちを大切にしない行為だけは絶対に許さない」

という学級経営の方針を示す

新年度のスタートに当たり、相手の気持ちを考え、お互いのよさを認め合える学級づくりをしていくという担任の方針を示すと共に、友だちを大切にせず、傷つける行為は絶対に許さないという学級のルールを確認した。そして、日常生活の中に見られる児童のよさを大切にす取組を行った。



##### (2) 日常の中での具体的な取組

###### ①わかる授業で自信を持ち授業で自尊感情を高める

教材研究を十分に行い、児童が夢中になって取組める授業を心がけた。そうすることで、学習に興味を持ち、進んで取組む姿が見えるようになった。また、発問を分かりやすく短くしたり、指示は一つの活動につき一つにしたりして、できたことを認めるようにした。そうすることで、「わかった」「できた」という経験を積み重ねて、自信を持たせることで自尊感情を高めていった。

###### ②子どもが気づかないでいる友だちのよさを学級通信で知らせる

子どもが一生懸命にやっていること、誰も気づかないでいる望ましい行為や思いやりのある行為などを教師が見つけ、学級だよりを通して伝えていった。そうすることで、今まで気づけなかった友だちのよさに目を向けると共に、友だちのよい行為にならって自分も行動するようになった。また、保護者からも認められることで自信を持ったり、保護者自身もクラスに対する見方を変えていった。

【学級だよりから】

「火曜日、図工の片づけの時のことです。みんなが次々に絵の具の水を捨てた後、水道の下に水がこぼれていました。それに気づいたKさんは、その水を雑巾でふき取っていました。もしかしたら、他にも気づいた人はいたかもしれませんが、気づいて行動したのはKさんでした。」



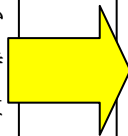
③努力したことを認め、児童を励ます温かい声かけで自尊感情を高める

チャレンジする課題を出し、努力してがんばっている児童をみんなで認めていくようにした。そうすることで、できなかったことができる喜びを感じられるようになっていった。また、教師が進んで児童のよさを認め、全員の前で伝えていくことで、自信を持って行動できるようになっていった。

(例)「発言千回を達成しよう」「都道府県を覚えよう」「百人一首を覚えよう」

④アンケート調査により児童の実態を知り指導に生かす

調査結果をみると、学級内で「冷やかし」や「いじめ」を受けていると感じている子どもたちとそうでない子どもたちがいるということがわかった。これは、ルールの定着していない学級の特徴で、自己主張がはっきりしている子どもたちは学級生活にある程度満足しており、そうでない子どもたちは侵害行為を認知していることがわかってきた。



⑤学習のルール、生活のルール、遊びのルールを決めておく

- 学習のルール
  - ・話を聞くときは、話し手を見ながら聞く。
  - ・話し手が安心するよう頷きながら聞く。
- 生活のルール
  - ・あいさつをすること
  - ・係活動を責任を持ってすること
- 遊びのルール
  - ・担任もいっしょに遊ぶ中で、それぞれの遊びのルールを守るようにしていく。

⑥友だちと協力してかわわりを深める活動を取入れる。活動の振り返りの時間を十分とり、お互いのよさを認め合う。また、教師も進んでよさを認めていく

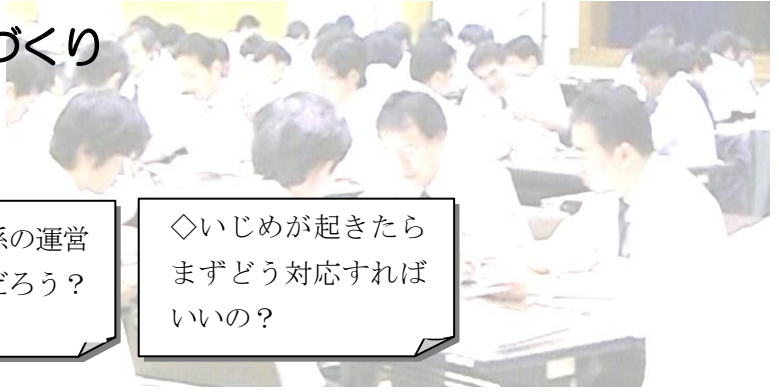
- 構成的グループエンカウンターを取り入れた授業を行っていく
  - 「いくつ」「ブラインドウォーク」
- 体ほぐしの運動で、ペアやグループの友達と楽しく体を動かす
  - 「二人ペアストレッチ」「丸太ころがし」「一本橋のすれ違い」「バランスウォーク」
- 行事を通して友だちとの関わりを深める
  - 「キャンプ」「運動会」「音楽会」



2 取組についての評価

- (1) ルールをきちんと決めたことで、子ども一人一人が自分のやるべきことをきちんと果たし、子ども同士の争いが少なくなった。そして、お互いが安心して生活をするできるようになった。
- (2) 子どもの頑張っている姿やできるようになった姿を認めることで、自分に自信を持ち、活動への意欲を高めることができた。
- (3) 友だちのよさに目を向ける活動を取入れたことで、お互いに協力し支え合って活動することができるようになった。

# いじめを許さない教職員集団づくり



## 全職員で共通理解・対応協力

◇校長先生の学校運営方針をどう受け止めたらいいたろう？

◇生徒指導係の運営の具体は何だろう？

◇いじめが起きたらまずどう対応すればいいの？

◇ いじめ問題に対しての学校長の運営方針、生徒指導係の運営の具体的下に、

### 全職員が一致協力すること、一人で抱え込まないこと

- ★自分の学級で起きたいじめは自分一人で解決する。
- ★自分の学級だけはいじめを起こさない。
- ★自分の学級の問題でなくてよかった。

意識改革

- ☆ いじめが起きたら、即、報告・連絡・相談・確認をする。一人で抱え込まない。
- ☆ 全ての教職員が全ての子どものいじめ問題にかかわる。
- ☆ 他学級であっても、一人の子どもを複数の教師で見て多面的に情報収集。些細な変化に気づき、教職員相互で情報交換。一致協力して取組む。

### ◇ 基本的認識

- 1 「弱者をいじめることは人間として絶対に許されない」との強い認識を持つ。
- 2 いじめられている児童生徒の立場に立った親身の指導を行う。
- 3 いじめの問題は、教師の児童生徒観や指導の在り方が問われる問題である。
- 4 いじめは家庭教育の在り方に大きな関わりを有している。
- 5 家庭・学校・地域社会など全ての関係者がそれぞれの役割を果たし、一体となって真剣に取り組むことが必要である。

- 1 迅速かつ適切に状況把握…親身になって受け止めながら、丁寧な事実確認をする。
- 2 自校のシステムにそって報告・連絡・相談・確認をする。
- 3 指導計画を練り、役割分担に基づいて、全職員で丁寧な対応をする。家庭へ連絡し、協力を呼びかける。
- 4 経過を逐次報告する。解決後も継続して見守る。

## 全職員の人権感覚を見直し、共通意識を高める

児童生徒の話を丸ごと受け止め、真剣に聴いているか。理解しようとしているか。喜びや悲しみを共感しているか。

児童生徒に不快感を与える言葉遣いになったり、一方的・威圧的な指導になったりしていないか。

友だちへの中傷やいじめを敏感に察知し、絶対に許さない態度を示しているか。「いつもの違い」に気付いているか。

## 全職員で、授業で共通して取り組むこと

- 児童生徒相互のコミュニケーションの場を設定し、よりよい人間関係づくりをしていく。
- 児童生徒の考えが他者に生かされるように支援することで、相互の自尊感情を高める。
- 欠席者への配慮をする。

- ・コミュニケーション能力
- ・自尊感情・自己肯定感
- ・人間関係づくり
- ・他者理解・自己理解
- ・表現力・アサーション
- ・学び合い
- ・求心力ある学級みんなの活動・学級づくり

## 取組例2(教職員)

### チーム力を生かす組織づくり ～「人権プロジェクト」からの発信～

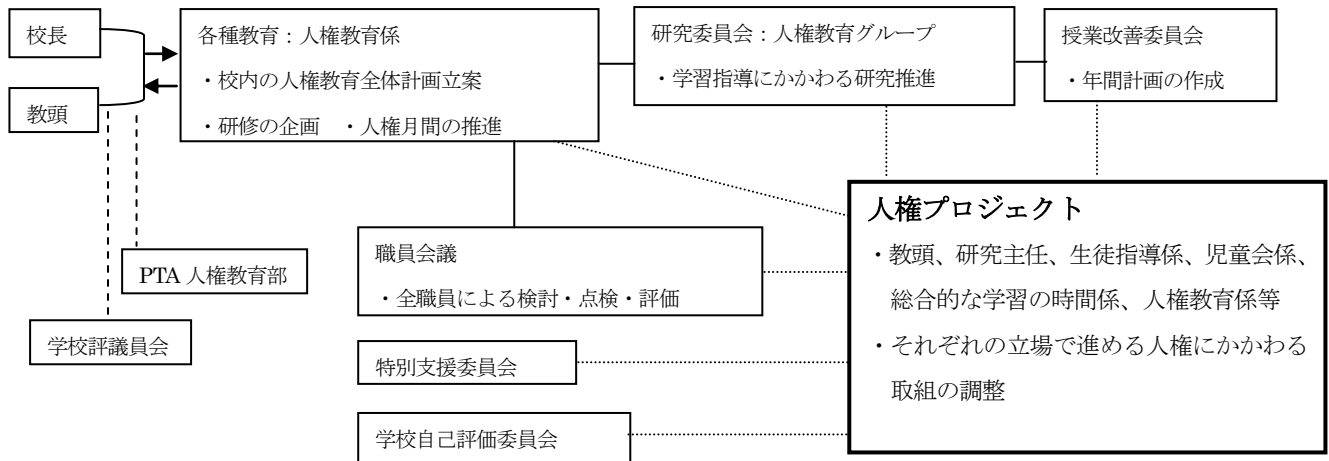
Point 校務分掌 コーディネート 組織力

#### 1 取組のねらい

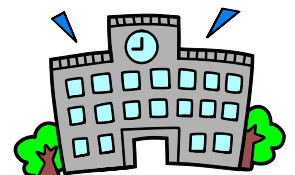
これまでの人権教育は、校内の人権教育係が計画立案から運営までをすべて行い、他の係との連携はあまり見られない、言わば「閉じた校務分掌」の中で取り組まれることが多かったように思う。しかし、よりよく人権意識の高揚が図られるようにしていくためには、関係する諸領域の係と積極的に連携し合い、学校教育のさまざまな分野から人権教育を進めていくことが求められる。例えば特別支援教育を進める上で特別支援教育コーディネーターが位置づいているように、人権教育係は、人権教育に関する研究の統括、学校運営全体との連絡・調整など、人権教育の推進にかかわる部分をコーディネートしていくことができないかと考えた。

#### 2 取組の内容

人権教育が学校全体の中で組織的に、かつ機能的に動いていくように、人権プロジェクトを立ち上げた。人権プロジェクトでは、以下のような関連する係が必要に応じて随時参加し、子ども達の実態を踏まえながら人権教育に関わる活動の方向を検討している。プロジェクトの招集や内容については人権教育係が提案するが、具体的な活動自体はそれぞれの校務分掌係が責任を持って進めていくようになる。(以下 組織図)



各係・委員会	人権教育と連携した活動
研究主任 授業改善委員会	研究グループをはじめ全教科で、各教科における人権教育に迫る視点を大切にしていく。
総合的な学習の時間係	各学年・学級の総合的な学習の時間の年間指導構想の中に、人権教育としての視点を明確にし位置づけていく。活動の中に見られる人権教育に関わるエピソードの集積と、職員の学び合い。
生徒指導係	職員会で話し合われる生徒指導の時間帯で、子どもと接する中から感じられた人権教育に関わるエピソードや子どもの姿、教師の振り返り等を積極的に位置づけていく。
児童会係	代表委員会・ふれあい委員会・清掃委員会を中心として、「あいさつ」「ふれあい」「清掃」に関する取組の中で、集中的に取組む活動と日常活動としてできる活動を明確にし、発信していく。
学校自己評価委員会	これまで積極的に踏み込んで評価できていなかった人権に関するアンケートの内容や行い方、結果の生かし方について検討する。
音楽科	単に歌を歌うだけでなく、歌に寄せた自分の思いや表現の仕方を発信し合い、全校でつくりあげていく音楽集會を構想する。





## 《人権プロジェクトの実際》

## 第3回人権プロジェクト要項

参加者 教頭・教務主任・生徒指導係・児童会係・人権教育係

## 1 各係としての2学期の取組

- (1) 研究委員会・総合的な学習から (→ そこで話題となったり決定されたりしたこと)  
教科指導・総合的な学習の中の人権的な視点を明確にするために  
→ 各学級の総合的な学習の時間の計画の中に項目として人権教育の視点を盛り込む。
- (2) 生徒指導から  
職員会の中の「生徒指導」の運営  
→ 学年会で話題になった子どもについて簡単な資料を出し合いながら全職員で共通理解する。  
発達障害をもつ児童への理解をどのように進めていくか  
→ 専門家のお話をお聞きする機会は可能か検討する。インシデントプロセス方式によって子ども理解を深められるようにする。その際、学年の中の特別支援委員の先生がリーダーシップをとる。
- (3) 児童会から  
三大目標達成に向けて  
→ あいさつについて意識が高まるように、校内放送も利用。「どうしてあいさつが必要か」「学級の中でのあいさつの様子」など各学級で話し合う。

## 2 人権教育の日常化に向けて

- ・ 人権コーナーのさらなる充実のための方策  
→ ふれあい委員会として活用する部分と、学級の取組を紹介するコーナーに分けていく。今すぐできる5年生から活用する。
- ・ 教師の人権感覚を見返すための「日報」への投稿  
→ 書かれている子どもについて、職員間で積極的に話題にしていく。そのままにしない。

## 3 取組についての評価等

人権プロジェクトを立ち上げ他の係と連携を図ったことで、それぞれの係が、自分の係からは何を、どのように職員・児童に発信をしていくことができるのかを考える機会が増えている。そして、学校生活の中の人権教育に関わる活動を掘り起こし、全校を巻き込みながら意図的・計画的に運営していくことにつながっている。それはつまり、一校務分掌の係だけでは難しかった学校全体を巻き込みながら人権教育のあり方を考えていく機運と、多方面からの同一歩調での取組ができつつあるということである。

今後、更に、なかよし月間・あいさつ運動・清掃活動・音楽集会・総合的な学習の時間など、様々な学習場面が、決して単発でなく、「互いの気持ちを考え合う学びの場」として関連をもちながら推進していけるようにしたいと考えている。また、いじめ・不登校対策委員会との連携も図っていけるようにし、広く人権教育全般にわたって考えていくことが必要である。

ここで大切なことは、単に新しい校務分掌を作っていくことではなく、これまでの人権教育係としての仕事を見直し、より充実を図っていくことである。人権教育係がいかに関連する内容をコーディネートし、チームとして人権教育を進めていくかが求められる。



## 取組例3(中学校)

子どもの声を聴く日常的な取組 ～「自問ノート」と「しっとりクラブ」～

Point つづる 子どもの声を聴く

## 1 取組のねらい

どの中学校でも、豊かな人間関係を育む上で、生徒の自己表現力やコミュニケーション能力を課題としていることが多い。特に自分の行為や気持ちを見返すこと、ありのままの自分を語ることを苦手としている生徒が多い。

この自己を見返すことや自己を語ることは、いじめ問題の発見や解決の糸口になったり、学級などの集団の中で、自分の居場所を見つけていく糸口になったりするだろうと考えた。子どもたちには、振り返りや綴るという活動を多く体験させたい。

また、自己を見返し見つめ直すという活動や自分の気持ちを綴るという活動の中から、ここでならその声を発することができるという場が見えてきた。そこは、共通する悩みや思いを感じている仲間がいる場であった。そんな場をつくろうと取組んでみた。

## 2 取組の内容

### (1) 自問ノート・・・自分の気持ちや思いを綴り、積み重ねていくノート

4月当初、「自問ノート」と称して全員に1冊ずつノートを配布し、道徳や学級活動の授業で、感想などの記入、行事や日常生活の振り返り、特に成長を実感したことについて、自分の気持ちや思いなどを書き綴ってもらい、毎回担任が集め保管した。時には、共感的にコメント(状況の確認・私メッセージで気持ちを書き、提案の形でまとめる)をしたり、学級通信でも担任の気持ちを綴りながら自問ノートを紹介したりした。

実際に、道徳の授業などの感想、各行事の前後の気持ち、その他成長を実感した事柄について具体的なエピソードで綴っていく活動をした。「生活ノート」は家庭で自由な内容で書くもの、「自問ノート」は学校で自分の気持ちや思いを言葉に表すものとして区別した。

☆気持ちを言葉にして表現していくことは、よりよい人間関係づくりにつながるだろう。

☆成長の実感の積み重ねは、自尊感情の高まりにつながり、いじめの防止になるだろう。

2年生の秋、帰りの学活で、「自問ノート」で一週間のふり返りの時間をとった。次の文章は、「この一週間、自分で成長したと感じたこと。良くなったと感じること。うれしかったこと」などについて書いてもらった内容である。5分間で200字書くという目標を達成した生徒も多くいた。学級通信にも紹介しきれないほどたくさんのおもしろい内容が綴られていた。

○(前略)今ではおおらかになって、むかつくこととか言われても「あっそ」って流すようになってきた。

これが成長☆あと、考えて行動できるようになった！前までは、何も考えずにボーっとして行動してたけど、今ではちゃんと考えてどんなことにも対応できるようになってうれしかった。うれしかったと言えば、いろいろな人と話せるようになった！クラスの人といろいろしゃべれてうれしいことだと思う。っていうかうれしい。あと、勉強がちゃんとできてきたのもうれしくて楽しくなってきた。テストに向けて頑張りたい。

○この一週間で振り返って、成長したことは、人の前で話すことが平気になってきたということです。選挙でのクラス訪問を重ねることによって、最初は心臓がバクバクしていたのですが、どんどん緊張しなくなってきました。人前で話すのは慣れたと思います。もっとこういうことに慣れていき、人前で話しても全然緊張しないようになっていきたいです。この一週間で一生に一度かもしれない体験をさせてもらい本当にためになる一週間でした。

次のような変化もみられた。3年生として最後の合唱コンクールに向けて取り組んだ際、ある生徒の練習当初の頃の気持ちと、本番が近づいた頃の気持ちについてである。

○はっきり言って、歌は大嫌いです。みんなが燃えていても真剣に歌う気になれません。歌わなくてもいいですか。放課後練習も出たくありません。合唱コンクールなんてなければいいのに…

○今までは自分だけのことしか考えず、誰かのためにとってことはしてこなかったけど、クラスのためにやってみようかなって思えるようになってきました。でもやっぱり歌は嫌いです。

### (2) しっとりクラブ・・・ありのままの自分を語らせる

あるとき、「最近Aさんがみんなから避けられている」「Aさんが心配」など、仲間はずしのような内容を書いた生徒が数名いた。そのAさんも「Bさんとけんかしてから……」というその状況とつながるような内容で書いてきた。Aさんから直接話を聞き、話のできそうな友達に自分の思いを語ってみようかと促してみた。Aさんのことに気づき心配している生徒数名にも担任が声をかけ、放課後集まって、それぞれの思いを聴き合った。

Aさんを含めて、語り合った全員が「わたし一人じゃなかったんだ」「思いを語れてスッキリした」「聴いてくれてうれしかった」という反応が返ってきた。すぐに解決するまでには至らなかったが、その数名の輪が広がって、避けることがなくなっていく。

その場のしっとりとした雰囲気が、ありのままの自分を語らせる原動力になったと感じている。これが「しっとりクラブ」のはじまりであった。そして、「しっとりクラブ」の意義等を学級の生徒たちに話し、その後も問題や悩みが生じたときには「しっとりクラブ」を出発点としていった。次第に生徒の方から「今日、しっとりクラブをお願いします。」という声が発せられるようになっていった。

#### 「自問ノート」・「生活ノート」と「しっとりクラブ」をつなげるポイント

- ①「自問ノート」・「生活ノート」の声をとらえ、その声を発してほしい当事者と構成メンバーを確認して声をかけ、主に放課後の完全下校までの時間帯で空き教室や研究室で行った。
- ②他人のことを語ると、悪口を言い合う状況になりやすい。自分のことを語り、自分の気持ちを語る場となるように心がけた。
- ③「しっとりクラブ」で語られたことを、その場にいなかった生徒や学級全体へどのようにつなげていけばよいかを意識しながら、学級活動として展開していった。
- ④本音を書き続ける気持ちを第一に考え、担任は、「みんなの声を聴きたい」「一人一人とつながりたい」という姿勢でメッセージをおくり続けた。
- ⑤学級の生徒全員と1対1の信頼関係ができたとき、ようやく「しっとり」とした雰囲気を築くことができたように感じている。

### 3 取組についての評価等

道徳などで以前と同じ教材を扱ったとき、前回の「自問ノート」の感想の見返しをさせることで、内容の深まりや考え方の変化を感じることができ、「自問ノート」は生徒が自分自身の成長を実感する手段になったようだった。このように小さな成長の実感の積み重ねが、やがて自尊感情の高まりにつながり、実際に、自分のことも友だちのことも肯定的に見ていくことが増えてきた。

「しっとりクラブ」で声を発することができたのは、まわりの生徒に、その声を受け入れようとする雰囲気があったからだということを学ばされた。

#### ～ 人権教育に関わる保護者アンケート例 ～

質問1 学校は、子ども一人一人のよさを認め、伸ばそうとしている。

(日頃の授業、学級・学年通信、懇談会、家庭訪問などの場面から感じること)

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ ふつう ④ あまりそう思わない ⑤ 全くそう思わない

質問2 学校は、差別やいじめのない社会を目指し、学校生活など身近な生活の中で、よりよい集団にするために、進んで行動する児童の育成に取り組んでいる。

(「進んで行動する児童」とは、例えば、友だちの気持ちを考えて行動する、困っている友だちやいじめられている

友だちがいたら声をかけたり話を聞いてあげられる、などでお考えください)

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ ふつう ④ あまりそう思わない ⑤ 全くそう思わない

質問3 担任は、あたたかく互いに協力し合う学級づくりに努めている。

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ ふつう ④ あまりそう思わない ⑤ 全くそう思わない

質問4 子どもは、各教科や道徳の時間・求めの時間(総合的な学習の時間)などを通して、自分を大切にしたり友達を思いやったりする心が育ってきている。

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ ふつう ④ あまりそう思わない ⑤ 全くそう思わない

質問5 子どもは、学校での人権教育を通して、差別やいじめのない仲間づくりを目指して行動しようとしている。

- ① とてもそう思う ② そう思う ③ ふつう ④ あまりそう思わない ⑤ 全くそう思わない

質問6 人権教育に関して、ご家庭で大切にされていることや、学校に期待されていることは、どんなことですか。学校への意見や要望も含めてお書きください。

## 「S先生の落とし穴」

6年生の担任のS先生は、秋の授業研究会に向けて、日々の授業づくりにたいへん熱心です。授業教科は国語、表現力やコミュニケーション能力の向上をテーマに取り組んでいます。

### 学習指導案より(抜粋)

「コミュニケーション能力とは、聞き手に自分の思いや考えをはっきりと伝えたり、話し手の思いや考えを共感的に聞いたりして、互いの思いや考えを伝えあう力である。

自分の考えを持っていても、恥ずかしがって発言できなかったり、発言しようと思わなかったりする子どもたちに、必要感のある学習や、考えずにはいられない学習課題を設定することで、どの子どもが発言できるようにしていきたい。



S先生はどの子どもが発言できるようにしたいと願って単元を構想していきました。しかし、「発言できる」という結果を求めたために、学級にはいつの間にか「発言できることがよいことで、できないことはよくないことだ」という空気が流れるようになってしまいました。発言に至るまでの過程を大事にしなければいけないにもかかわらず、結果を重視してしまったのです。

やがて学級には、「できないことはよくないことであり、改善しなければいけないこと」というルールが生まれていきました。できない人を見下すような視線や、できないことを中傷する言動にS先生が気づいたのは、しばらくたってからのことでした。教師のこのような姿勢が、いじめを生むことにつながってしまったのです。

## いじめのない集団とは

### I am OK.

- 子どもが自分を大切に思い、自信を持っている。
- 自尊感情(セルフエスティーム)が育っている。

### You are OK.

- 相手の人格を尊重することができる。
- 非攻撃的自己主張(アサーティブネス)ができる。

### We are OK.

- 集団への帰属意識があり、共感的で温かい人間関係である。
- お互いの思いや気持ちを伝え合うこと(コミュニケーション能力)が育っている。

### この三つが育っている集団です。

#### いじめのない集団づくりのために、

今までの実践を見直してみましよう。よりよい集団にするための視点に立つことによって、価値を再認識でき、支援の方法が変わってきます。

